

JANSI Annual Conference 2023 挨拶

原子力規制委員会の山中伸介でございます。

本日は JANSI Annual Conference 2023 にお招きいただきありがとうございます。一言ご挨拶申し上げたいと思います。

この JANSI Annual Conference、私自身、2 回目の出席となりますが、原子力規制委員長を拝命してからは初めての出席となります。今回は、原子力規制委員長の立場で JANSI に期待することをお伝えしたいと思います。

今年は東京電力福島第一原子力発電所事故から 12 年の年を迎えますが、事故の大いなる反省のもと様々な組織が設立されました。2012年に設立された原子力安全推進協会（JANSI）は、日本の原子力産業界における安全性追求を確実なものとするため、原子力事業者の安全性向上活動を牽引してこられました。

JANSI は主として事業者出身の 200 名の職員からなる、原子力の実務力が高いプロの集団であると認識しております。私自身は JANSI は民間の原子力規制機関であると考えており、その規模は

原子力規制委員会に匹敵する組織であります。JANSI は東京電力福島第一発電所事故直後に設立された組織でもあり、その活動は他の組織に比べ長く活動実績も積み重ねられていると思います。

私は、昨年9月に原子力規制委員長を拝命いたしました。その際の挨拶の中で、特に、情報発信と対話、現場重視、規制に関する人材の育成に注力していきたいと述べました。これは、東京電力福島第一原子力発電所のような事故を二度と起こさないという同じ思いである JANSI への期待にも通じる部分です。

本日は、そのような思いも込めまして、1. 技術情報の共有、2. 継続的安全性向上、3. 検査と安全・セキュリティ、4. 人材育成について、の4つのお話をさせていただきます。

2021年の Annual Conference では、原子力規制委員会委員として私から同様のテーマについて JANSI の活動に対する私の印象と期待を述べました。

それからの2年間は新型コロナウイルス感染症の流行という厳しい期間ではありましたが、原子力規制委員会も JANSI も原子力施設の安全性向上を目標とし方法は異なるものの共に事業者の

規制に努力と改善をしてきたことと思います。私自身も両者の対話は極めて重要であると考え、本日ご挨拶をさせていただくことに致しました。

1. 技術情報の共有

まず、技術情報の共有についてお話ししたいと思います。

JANSI の「ニューシア」は、トラブル情報などの情報が広く一般に共有されています。原子力規制委員会でも技術情報検討会の中で、国内外の原子力施設に関連する情報を共有し、安全性向上への重要度の議論、検討を行っていますが、ニューシアは重要な情報の源であると考えています。

日本では、新規制基準が制定され、電源や水源の強化がなされ、安全性が大きく向上したと考えます。ただ、各国の原子力発電所の様々なトラブルのデータを見ると検査や点検の方法が大きく異なることに驚きを感じます。そのような観点から、日本の多くの強化策が有効に働く状態にあるのかを再度、分析、検討している所です。

JANSI がトラブルや事故のデータが迅速に公表されるという点では高く評価しています。しかしながら、民間の規制機関を自負されている JANSI には、データの分析、評価を実施し、原子力事業者に対して有効な安全向上対策を提案するとともに、そうした活動を公開することを期待しております。

是非、その分析、検討の結果については、原子力規制委員会と共有し、対話や議論を行いましょう。

2. 継続的安全性向上

次に、お話したいのが、継続的安全性向上についてです。

これは、東京電力福島第一原子力発電所の事故の教訓の一つであり、原子力規制委員会では、原子力安全について新しい知見が得られた場合、その知見をすぐさま規制基準に取り入れバックフィットをかけるという方法をこれまで取ってきました。一見非常に優れた安全性向上の手段に見えますが、原子力安全の第一義の責任は、事業者にあります。バックフィット以外に、より良い安全性向上のやり方、規制以外の自主的な様々なアプ

ローチがあると考え、昨年、原子力規制委員会においてバックフィットのあり方の考え方をまとめたところです。

デジタル安全保護回路に関わる共通要因故障対策について、通常のバックフィットというやり方ではなく、原子力規制委員会了承のもと ATENA 主導により事業者自ら技術要件を定め、自主的取り組みとして実施して頂きました。まだ、事業者とのやり取りが不十分ではないかと思われる所もありますが、今後、自律的かつ計画的に、対策が進められていくものと期待しています。BWR の建屋の水素対策についても、バックフィットによる対策と同時に自主的な安全性向上の検討を求めている所です。

また、継続的安全性向上報告書については、事業者からも様々な要望が行われておりますが、原子力規制委員会においても現在検討しなければならない重要課題として位置づけています。

JANSI も原子力事業者についてレビューを行い、安全性向上について評価、支援などを民間における規制活動を行っています。ただ、レビュー結果がどう事業者の安全性向上のための活動に反映されたのか良く見えません。

今後、継続的安全性向上について JANSI とも議論をさせて頂きたいと考えています。

3. 検査制度と安全・セキュリティの改善

次にお話したいのが、2020年4月より開始された新たな検査制度と安全・セキュリティの改善です。

新型コロナ感染症の流行という困難な状況下にはありましたが、リスク情報を活用したパフォーマンスベースの新検査制度がスムーズにスタートが出来ました。検査官のフリーアクセスについても、現場における信頼関係の構築が上手く機能してきていると思っております。

JANSI は、すでに CAP、CM などの検査関係の様々なガイドを作成し、事業者に安全性向上を促す幅広く活動を展開されています。安全について非常に多くの取り組みを実施されており実行性が上がっていると聞いております。

一方、原子力施設のセキュリティについては、その性格上その情

報が非公開とされることが多く、その活動は原子力規制委員会においても事業者においても限られた人数の職員で行われてきました。様々な課題がセキュリティには存在することが認識されるようになり、規制委員会でも審査、検査の改善を進めている所です。セキュリティの審査、検査能力の向上や安全とセキュリティのインターフェイスの問題が重要であり、それぞれの課題を解決していくことに加えて情報共有を改善していくことが大切です。

勿論、セキュリティについては、事業者間の情報共有や課題の抽出が困難な分野であるとは思いますが。原子力規制委員会は、安全同様に JANSI の主導的な取り組みを望んでおりますし、産業界全体としてセキュリティの強化のための共通の素地が構築できると考えております。

JANSI には、事業者全体で共有できる取り組み、改善などの支援についての役割を期待していますし、また、原子力規制委員会との協力も可能ではないでしょうか。

4. 人材育成の必要性

最後は、原子力安全、セキュリティの向上のための原子力分野に

おける人材育成についてのお願いです。

昨年、JANSI 理事長と対面で議論する機会があり、安全文化や人材育成についてお話することが出来ました。

最近の様々なトラブルの発生は、原子力産業界における組織文化が安全やセキュリティを第一に考えるものとなっていないことが要因の一つになっていると考えます。加えて、それぞれの事業者の職員の現場力、技術力の向上も併せて考えて頂きたい課題です。

事業者の技術的能力や文化を形成するのは人であり、人を生かし組織を強くするためには人材育成が大切です。現在、大学での原子力教育が非常に脆弱になっている現状を鑑みると、人材育成についても、JANSI の役割の一つとして期待したい所です。JANSI が今後の我国産業界における原子力安全やセキュリティを担う人材の育成に、より一層取り組まれることを期待します。

JANSI が ATENA などの他の組織とも協力し、民間の規制機関として発展されますよう期待しております。加えて、原子力安全、セ

キュリティについて原子力規制委員会との対話にも様々な障壁を越え取り組まれると同時に、社会に開かれた組織として新たな行動を起こして頂きたいと思います。

一方、我々、原子力規制委員会もより一層、原子力規制について研鑽するとともに、様々なステークホルダーとの対話に努めてまいりたいと考えております。

JANSI の今後のますますの発展を祈念し、簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきたいと思います。

ありがとうございました。